

# 『ジェイン・エア』と『ヴィレット』における孤児の遍歴

## ヒロインのアイデンティティーと空間の問題

石井 麻璃絵

### はじめに

Thad Logan や Judith Flanders、Andrea Kaston Tange など家庭性を研究する近年の研究者たちは、19 世紀ミドルクラス社会の間で高まったプライバシーへの関心、屋内空間における分化への興味、社会的地位の明示への欲求が、住人を階級やジェンダーのアイデンティティーにそって行動範囲を制限する「壁」を屋内空間に生み出したと指摘する。本発表は、ミドルクラスの家内部に住人の空間仕様を定める一定の建築ルールがあったとするこうした近年の研究を前提に、そのルールに従わないシャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë, 1816-1855)の孤児のヒロインたちに注目するものである。社会が女性に与える小さな部屋から脱出し、自己実現を果たすのにより都合のいい場所を「家」とするジェインとルーシーの姿から、社会的構造物としてあった家の姿が「個(個人)」の拡大とともに変容していることを指摘したい。

### 1. *Jane Eyre*

『ジェイン・エア』(*Jane Eyre* 1847)は孤児のジェインが成人になって結婚するまで5つの建物を旅する話である。それぞれの建物はミドルクラスの家父長制社会を象徴し、従者を含む住人は自身の社会的アイデンティティーにそった空間の使用を守っている。顕著な例がゲーツヘッド屋敷とソーンフィールド屋敷である。アップーミドルクラスのリード夫人は夫亡き後、賢い母親、よき女主人としてゲーツヘッドを管理している。屋敷の中心は彼女が子供たちと団らんを楽しむ客間である。居候であるジェインはリード一家のいる客間に入ることを許されず、一日の大半を子供部屋で過ごす。女性が家族と客人をもてなし、家事をする場であった「客間」が家の中心であったのに対し、「子供部屋」は主要な家族の部屋から離れた周縁的な空間であった。これは子供の社会的アイデンティティーが未成熟なためであり、子供たちは子供部屋から客間や食堂に両親から招かれることでミドルクラスの価値観を学んだ。ゲーツヘッドでは紳士の子供であるリード家の子供たちが頻りに客間に呼ばれる一方、ジェインはほとんどこのチャンスを得ない。曖昧なアイデンティティーのまま幼少期を過ごした彼女はやがてローウッド慈善学校で淑女のたしなみを含む教養を身につけ、quite a lady なガバネスとしてゲーツヘッド屋敷で働き始める。しかし、そこでも彼女は淑女や紳士、他の従者たちと交わることはできず、居場所がなく廊下や階段をうろつく。「廊下」や「階段」は家族、従者、客人が共通して使うことから特定の階級やジェンダーのアイデンティティーに帰属しない liminal spaces とされた。Tange は別個の部屋と部屋を引き離すと同時に繋げた liminal spaces を、ミドルクラスの住人(特に淑女)のアイデンティティーを脅かすガバネスの曖昧な社会的立場を象徴するものと考察した(178)。ジェインもロチェスターに求婚されることで淑女となる可能性をほのめかす。しかし、ブロンテの作品では貧しい女性が客間の淑女に昇格するという19世紀イギリス小説においてしばしば王道であったプロットは、必ずしも女性の幸福を約束するものではないとして否定される。『ジェイン・エア』ではリード夫人とその娘たち、ローウッドに預けられた多くの女子生徒たち、そしてジェイン自身によって社会が女性に与える居場所が男性家族の破産や都合で容易に失われうることが示される。このことはブロンテの他三作品にも共通して見ることができる。ジェインは最終的に火事による怪我で活動範囲が著しく狭まったロチェスターと結ばれる。彼らが家庭を築くファーンディーンの館は長年空き家になっていたことから家具が配置されていない。用途がはっきりしない部屋同士の間にはジェンダーや階級の壁があるとはいえ、また屋内にのみ活動を制限されたロチェスターが女性化されたことで、ジェインは男性の帰りを客間で待つ女性の生活から解放される。さらに彼女は受け取った遺産によって自身の家を建てることも可能であると豪語する。

### 2. *Villette*

『ジェイン・エア』と同じく自由と自立を求める孤児を主役にした『ヴィレット』(*Villette* 1853)は、より女性の家庭生活と社会生活のバランスを探るものになっている。ルーシーの孤児性(orphanhood)はポーリーナ・ホームとの対比によって強調される。幼少期、ポーリーナは父親の都合でブレトン家に預けられる。一時的に孤児と同じ境遇に陥った彼女は典型的なミドルクラスの女性と称されるブレトン夫人を模倣し、グレアムの身の回りの世話をすることでブレトン家における自身の存在意義と居場所を見つける。ポーリーナは David Floyd がいう模倣の孤児(the mimic)であろう(8)。彼女はルーシーに孤児のミドルクラスの女性が社会に溶け込むために取るべき行動を示してみせるのだ。しかし、ジェインがリード家に馴染もうとしなかったように、ルーシー

もまたブロンテ家に自身を適応させようとはしない。ルーシーはグレアムによって象徴されるミドルクラス社会が *liminal women* に「狭い空間(little place)」(V59)と地味な活動しか与えないことに対して憤りを覚える。ルーシーは反逆の孤児(the revel)であり、自身のアイデンティティーを生まれた階級や家系ではなく、自分が何者になれるか、何をできるかから模索するのである。

外国の地ヴィレットでさらに曖昧になったルーシーの階級アイデンティティーは彼女により大きな自由を許す。やがて彼女は寄宿学校の校長として成功することを目指すようになる。Monica Cohen は当時の家庭の安楽を提供するミドルクラスの家を模倣した寄宿学校や病院、ホテルを *domestic institution* と呼んだ(55)。家庭的な女性のイメージが理想化される一方、19世紀はミドルクラスの女性の社会進出を見た時代であり、こうした建物を運営する女性は「ビジネスの洞察力(business acumen)」をもつ「有能なビジネスウーマン(effectively businesswomen)」と考えられた(Gordon and Nair 181)。ルーシーを教師として雇うマダム・ベックは有能な経営者で、弟ポールを含む男性教師たち、さらに自身よりも階級が上である生徒たちの家族をも完全に管理している。彼女の施設は寄宿学校と通学学校の二つからなり、百名以上の生徒と複数の教師たちが一つの大きな家族のように暮らしている。作者ブロンテはこのパブリックとプライベートを分ける壁が希薄な *domestic institution* に、女性の活動領域の拡大と、従来の「家」に代わって女性に安全と安定を約束する場所としての可能性を模索している。後にルーシーはマダムの学校をモデルに借りた家の中に教室を設けて学校を開く。後に隣家も改装して生徒たちが寄宿するスペースを作ると、彼女は教室と生徒たちが寝食する場所、自身が生活する場所を忙しく行き来するようになる。生徒と教師は疑似的な家族関係を結び、また、伯爵令嬢と中産市民の娘が肩を並べて勉学に励むことで校内では公私だけでなく階級の隔ても曖昧になる。この、女性によって管理された女性のための「家」兼「経済的自立を許す仕事場」は、『ジェイン・エア』のマリア・テンプル、『教授』(*The Professor* 1857)のゾライード・リュートルとフランシス・アンリ、も実現しているが、いずれも結婚後に手放している。『ヴィレット』ではヒーローが途中退出することでヒロインのパブリックな生活が維持される。物語のラスト、ポールの乗った船が難破したことが暗示され、ルーシーは彼女の学校にテキストを搬入する本屋ムッシュ・ミレと交友を結んで寄宿学校を繁栄させる。財産を蓄えるのが苦手であると描写されたポールを退場させることで、『ヴィレット』では男性家族の浪費や破産によって崩壊するミドルクラスの家に取り代わり、勤勉な女性によって管理された寄宿学校が女性の安全な家となるのである。

## 結論

『ジェイン・エア』と『ヴィレット』の孤児のヒロインは、ミドルクラスの社会を象徴する建物のなかで *liminal spaces* に追いやられることも、客間の女性となることも拒絶して旅を続けた後、自身が中心となれる建物を手に入れる。両作品において孤児のカテゴリー化されない曖昧なアイデンティティーは、不安定で哀れなものではなく、客間に束縛される運命にある伝統的なミドルクラスの母、妻、娘たちよりも優位な要素として主人公たちの旅を助ける。ジェインは社会的な生活を手に入れる代わりに、女性化された男性との間に男女平等な屋内空間の使用を実現した。ルーシーがポールと結ばれないラストは、自立を求める女性にとって理想の男性は家庭を営む結婚パートナーではなく、ビジネスパートナーであることをほのめかす。両作品のラストは、住人に階級とジェンダーの役割を課す空間使用のルールを定めていた「家」が、出身階級や性からアイデンティティーを模索しない個人の出現とともに変容している様子を表しているのである。

## 主要参考文献

- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Eds. Margaret Smith and Sally Shuttleworth. Oxford: Oxford UP, 2000. Print.
- . *Villette*. 1853. Eds. Herbert Rosengarten and Margaret Smith. Oxford: Oxford UP, 2008. Print.
- Cohen, Monica. *Professional Domesticity in the Victorian Novel: Women, Work and Home*. Cambridge: Cambridge UP, 1998. Print.
- Flanders, Judith. *Inside the Victorian Home: A Portrait of Domestic Life in Victorian England*. New York: W.W. Norton & Company, 2004. Print.
- Floyd, David. *Street Urchins, Sociopaths, and Degenerates: Orphans of Late-Victorian and Edwardian Fiction*. Cardiff: U of Wales P, 2014. Print.
- Gordon, Eleanor, and Gwyneth Nair. *Public Lives: Women, Family and Society in Victorian Britain*. New Haven, Conn.; London: Yale UP, 2003. Print.
- Logan, Thad. *The Victorian Parlour*. Cambridge: Cambridge UP, 2001. Print.
- Tange, Andrea Kaston. *Architectural Identities: Domesticity, Literature, and the Victorian Middle Class*. Toronto: U of Toronto P, 2010. Print.